

佐藤史子

日本アイ・ピー・エム (株)

バイアスを外そう

前回コラムを担当されたお茶の水女子大学の伊藤先生からバトンを受け取りました。伊藤先生は、私が企業研究所に入社してまだ数年のころ、同じ研究グループのリーダーとしてお世話になりました。大学院で物理を専攻したあと現研究所に就職した私は、情報系の研究に取り組むのに戸惑いを感じておりましたが、伊藤先生が音楽と可視化という好きなことで研究しているのを見て、とても刺激を受けたことを思い出します。

私は元々物理の分野で博士課程に進学し研究者を目指そうかなとぼんやり考えていたのですが、研究で使い始めたコンピュータの世界に興味を持ち、ユーザー側ではなく新しく面白いことを作る側に行きたいと思ったことがきっかけで分野を変え企業の研究所への就職を志しました。入社後、最も分野の違いを感じたことの1つは、研究として取り組むべき問題の決め方です。物理の場合は“世の中に存在するかどうか分からない”、“存在するけれど理由が分からない”というように問題は自然に存在します。情報の場合は、研究対象がソフトウェアやネットワーク等人間が作り出したものであるため、解くべき問題をどのように定義すればよいのか大変戸惑いました。このように自然科学の分野における研究と情報の研究とのギャップに悩んでいた私が、自然科学の研究に取り組んだ期間よりはるかに長い年月を情報の研究および開発に携わってこられたのは、自由な環境や周囲の方々の助けが大きかったなと感じます。

振り返って考えれば、情報を専攻してきたわけでもなく情報の研究を仕事とするには圧倒的に知識不足だったと思うのですが、そのことをあまり知らなかったからこそ、無謀にも分野を変えて研究職を目指したのだと思います。もしもう少し知識があって、優秀な研究者の方々を知っていたら物怖じしてしまったことでしょう。結果的になんとか新しい分野でチャレンジする機会をいただき、ここまで続けてこられたことは、無謀な挑戦をしなければ起らなかったことで、現状に縛られないことの重要性を感じます。

最近、若手社員や学生さんの相談を受けることが多くなりました。特に、女性社員や理系の女子学生のメンターをさせていただくことが多いのですが、そ

でいつも感じることがあります。SNSのおかげでさまざまな情報を手に入れることができますから、自分でよく調べて考えているなあと感心する一方、多すぎる情報に振り回されて無駄に悩んでいるのではないかなと感じます。情報は多いですが、その多くは特定の個人の視点での情報であり、自分に当てはまるのかどうかは分かりません。以前は他人からの情報は限定的でしたから、自分で身を持って体験するしかありませんでしたが、知らない誰かの情報を見て必要以上に心配しているのを感じます。情報がありすぎるからこそ、むしろ自分が感じたことや、やりたいことに敏感になり、不必要な雑音には耳を塞ぐくらいの気持ちで挑戦してほしいと思います。

アカデミアでは女性の研究者の割合が少ないことが問題視され、大学でもダイバーシティの取り組みが広まりつつあるようです。企業でも例外ではなく、女性の技術者・研究者を増やしダイバーシティを推進するのはビジネス目標を達成するのと並んで重要な活動と位置付けられており、私は女性技術者にフォーカスした支援活動をするCOSMOSという社内活動にも携わっています。大学と共同の活動としては、女性技術者・研究者の支援を考えるワークショップを開いたり、大学生向けの授業を行ったりしています。草の根的な活動ですが、大学や高校など社外との連携による活動を継続して増やしていき、男性の中で孤立しがちな女性技術者や理系女性学生の皆さんが不必要な情報に惑わされないように手助けしていければと思っています。

本会の編集委員をさせていただいている立場としては、なにか女性技術者・研究者支援という視点で産学連携の活動ができないだろうかと考えております。今でもたとえば女性は理系より文系の方が強い、といった昔ながらの無意識な偏見（アンコンシャスバイアス）が存在しますし、女性自身がそういった意識に捉われた考え方をしていることもあるように思います。大学との連携に加えて、本会会誌の女性のジュニア会員を増やすなど、中高生のころから理系および情報学に興味を持ってもらえるような支援活動の必要性を強く感じます。

来月の執筆者として本会の現編集委員としてご活躍されております津田塾大学の稲葉利江子先生にバトンをお渡ししたいと思います。女性の活躍に多大な貢献をされてきた津田塾大学における研究者支援の取り組みについてぜひお聞きしたいところです。